

『玉條一籖』に見える道教経典について

若松 信爾

九州女子大学人間科学部人間文化学科
北九州市八幡西区自由ヶ丘一― (〒八〇七―八五八六)

(二〇〇九年十月五日受付、二〇〇九年十一月十七日受理)

はじめに

平田篤胤(一七七六―一八四三)より始まった日本の神と中国道教の神との習合化は、篤胤没後の平田学派にも継承され、宮地水位(一八五二―一九〇四)により大成されたと考えられる。このような習合思想により、宮地水位を開祖とする宮地神仙道はその特色として、教義の中に多数の道教的教義が取り入れられていることが指摘されている。宮地神仙道の最終的目標は道教と同じく神仙となることを目標としており、従来の日本神道とは趣を異にするものであった。その為宮地水位の著作には多くの道教経典つまり道書(以下、道教経典を道書と表記する)を根拠としてその教義を述べていることが看取される。しかし、宮地神仙道の教義の全てが道教教義をそのまま踏襲したものではないと思われる。そこには宮地水位の道書に対する理解と、道教教義に対する取捨選択があったことがその著作から窺える。そこで本稿では主として宮地水位の道書に対する理解の仕方を考察し、宮地水位が

膨大な道教文献の中より、何を自身の教義に採用していったのかという問題を、彼が道書の中より昇仙の真伝と認識し、その部分を道書の中から抄録したといわれている『玉條一籖』という著作から見てゆくことにする。

一、宮地水位の道書に対する認識

宮地水位が夥しい量の道教経典を所蔵していたことはよく知られている。宮地神仙道・道統四代を継承した清水宗徳の『宮地神仙道玄義』によれば「事実宮地家には土蔵へ入れた貴重道書の外、八畳の書斎から神殿に至る廊下までも大本箱が数十架ずらりと並んで足の踏み入れ所もない有様であったことは現在の目撃者の齊しく語るところで、先生自身も「其数幾万巻ナルヲ知ラズ」と誌されて居り、而も其の大部分が求道好学の士の垂涎措く能はざる道書仙経の珍籍であった。其中でも京都で発見されて入手せられた百二十二巻の『雲笈七籖』や中国地方の某所に隠没して居

たものを遊歴中に得られた『墨子枕中五行記』及び『雲笈』『道藏』の異本類は貴重書中の貴重書で、先生も「韋編百度絶ツ」と誌されている。^①とあり、凄まじい数の蔵書量であったと思われる。中でも興味深いのは宮地水位の蔵書の中に先ほど挙げた『墨子枕中五行記』の他に『鴻宝淮南畢術記』・『玉女隱微』等の稀書を有していたという記録である。^②これらの書は現在完本は存在せず、僅かに『鴻宝淮南万畢術記』の逸文のみが『太平御覽』等の類書に引用されている。これらの三書については『抱朴子』『遐覽』に、

其の變化の術の大なる者は、唯墨子五行記有り。本は五卷有りしが、昔、劉君安未だ仙去せざりし時、其の要を鈔取して、以て一卷と爲せり。其の法は藥を用ひ符を用ひて、乃ち能く人をして上下に飛行し、無方に隠れ淪み、笑を含めば即ち婦人と爲り、面を蹙むれば即ち老翁と爲り、地に踞れば即ち小兒と爲り、杖を執れば即ち林木と成り、物を種うれば即ち瓜果を生じて食ふ可く、地に畫せば河と爲り、攘を撮めば山と成り、坐ら行廚を致し、雲を興し火を起さ令め、作さざる所無きなり。其の次に玉女隱微一卷有り、亦形を化して飛禽走獸及び金木玉石と爲し、雲を興して雨を致すこと方百里、雪も亦之の如し、大水を渡るに舟梁を用ひず、形を分ちて千人と爲し、風に因りて高く飛び、無間に出入し、能く氣を吐きて七色となり、坐ながら八極及び地下の物を見、光を

放つこと萬丈にして、冥き室も自ら明となる、亦大術なり。然も常に諸星數十を歩すべく、曲折識り難ければ、能く之を譜もの少なし。其の淮南鴻寶萬畢、皆此の書に及ぶ者無きなり。^③

とあり、人体を変化させる術、或いは分身の術というようなこと等が行える方法を記した書物であるとしている。このような現在伝わっていない稀書までも蔵していたとされる宮地水位の蔵書であるが、宮地水位自身は多数の道書に対して如何なる解釈をしていたのであろうか。当然宮地神仙道は多くの道教教義を摂取して成立しているとしても、中国道教そのものではない。そこには宮地神仙道における独自の道教教義の受容の在り方があり、そこに宮地水位の道書に対する独自の解釈が窺えると考えられる。では一体どのように宮地水位が道教・道書を捉えていたのかということが問題となる。そこで以上のような問題を宮地水位の著作から見てゆくことにしたい。先ず神仙の道は伝授すべき人物がいなければ、妄りに伝授すべきではないとして、『伝道開端編』では『太清丹經』・『列仙拾遺』・『抱朴子』等の文を引用し、

さるを浅学售道の輩、頻りに余に神仙の玄旨を尋ね問ふと雖も、其玄理を伝授せざれば、售道の輩、余が目には及ばざる処にて云ひけらくは、道学者の一僻、或は天窓を洩し天機を聞

くなど云ひて其道を伝へずなど、種々に窃かにそしる人も数多あるめれど、余は神仙司命の掟を遵守せる故に、其人にあらざれば、本文の如く、頭を叩きて血を流すといへども伝へず。また其人を得るに至りては、天神地祇に祈誓して後に、神仙微妙の玄理を説きて其道を授く。然るに其人にあらざれば、授かりても其道行はれず。こを譬へて云はむに、不鍛練の人に名剣を以て授くるが如く、却つて禍を求むるの媒となれり。⁽⁴⁾

と述べている。要するに伝授すべきではない人物に伝えれば禍があるというのである。このため通常の人間では神仙の真伝を得ることは困難であるといい、『玄道或問』においては、

或人曰く、君の談の如きは我始めて之を聞く。宜なる哉。我『玄経』を閲すること積年、熟読其道を行ふと雖も行はれず。我其人ならざる歟。又『玄経』は偽説にして人を迷はす歟、如何と。⁽⁵⁾

という疑問に対し、

余答へて曰く、子は私利を的にして学ぶ。故に其道行はれず。又妙経を得ず。又子の如きは中途にして倦み、竟に其道

を修せざるの兆なり。故に其道を学ぶと雖も行はれず。是れ玄妙の以て玄妙と爲す所なり。⁽⁶⁾

と答えている。つまり、仙道を修する動機が私利私欲のみであれば、神仙の道の真伝を得ることができないとし、更に正しい道書も得ることはないとしている。また、真伝の記された道書というものが如何に得難いものであるかという点については、

或人之を聞きて憤然として曰く、劉向の著す所は七十余仙、王世貞輯次する所は五百余仙なり。其中私利を的にして仙を得たる者は如何と。余答へて曰く、真に道を得たる者は三十人に満たず。偽名の道士尤も多くして、偽書を著はし以て後世を欺く。又多く短を譲り、愚を匿し、不知を恥とし、己に勝る者に請問することを求めず、蠢爾として窮を守り面牆して立ち、又た俱に拱黙して已むのみ。乃ち復た実に道有る者を憎忌して之を謗毀し、彼の声名の己に過ぐるを恐るゝなり。此の如き偽道士の著す所の偽書山の如し。故に後世之に迷ひ、之を勤むるも其道行はれず。必ず神化を虚誕に推して信ぜざるに終り、真の妙経を得ること能はず、中道にして斃る。⁽⁷⁾

とあり、世間にいう所謂仙人の話、或は道書の類には、偽道士の

製作した偽書が多く流布しているというのである。つまり、数多の道書が偽書であり、これらの書物を熟読したとしても畢竟真伝を得ることはなく、まったくの無益だとする。これらの偽書については『神仙靈感使魂法訣』においては、

余道書を閲するに、不要のもの二千卷に近し。而して又其中にも疑事あるなり。⁸⁾

といい、二千巻近い道書が偽書であると主張している。その点を理解していない場合は、『靈胎凝結口伝』では、

かゝる輩は偽仙の偽伝せる書籍而已見て是を放毀し、真の妙説に心鏡うつらず、此を以て天然清浄の大道に通達せず。⁹⁾

とし、また、

偽仙の書籍は山をなすほど有れども、行ひて見よ、いかで其儘の体を不滅に止むる事を得んや。¹⁰⁾

と述べ、偽書を読み如何に修行を積んだとしても徒勞に終るといふ。しかし、全ての道書が偽書とはいえないとして、

道書たるものは深微の道あるものなれども、そは道書にて名の高く聞へたるは、墨子『枕中五行記』、鴻宝『淮南満畢術紀』、¹¹⁾『玉女隠微』等は真に変化の極度を説きたる書なれども、十が七までは偽言混入したるものなり。他の諸の道書も大底は同じ事にて、偽りたるものなり。然れども其中にて真に人間の覚り得る事の難くて、天理契ひたる靈妙の術も含入したるなり。¹²⁾

とあるように、多くの道書には偽言が混入しているが、その中にも真伝が伝えられている場合があるとしている。また前述の『神仙靈感使魂法訣』においては、

堅磐曰く、余、諸仙経を閲するに、靈感法の名数多有り。或は感冥法と曰ひ、又守一玄丹感精法と曰ひ、また内外靈現法と曰ふ。此法神仙の至つて秘する所の真法にして諸仙経に其妙訣を脱す。故に妙道の士、修して必ずしも行はれず。¹³⁾

と記されているように、道書には敢えて真伝を秘する為に、その部分を記さない場合もあることを述べる。このような例は『道蔵』とても例外ではなく、『仙人下戸解法訣』に以下の言説がある。

さて、『道蔵』にも水尸解、火尸解、兵尸解、竹杖尸解、烏尸解と区別して、其尸解をあげたれども、真の伝を脱したるか、理に於ては行はるべき法とはある事なし。⁽¹³⁾

これも同様に真伝を脱している部分があるとする。つまり、宮地水位の道書に対する認識は、道書には偽書が多数存在するが、偽書の中にも真伝が混入し、また真伝にも偽言の部分がみられ、或いは真伝を秘するが為に敢て文章を脱する等で、しかも、道書の真偽を弁別する作業は極めて困難であるが、その作業を行うことが必要であるとする。では宮地水位自身は如何にしてその作業を行ったのであるかということが問題になるが、例えば喬順の『昇仙訣録』という書に対して、

此の昇仙訣録は偽書なる事を余慥に見貫きたる訳あれど、今茲に要なければ云はす。⁽¹⁴⁾

と述べるようにその具体的な判別法を述べてはいない。しかし、宮地水位が独自の判断で真偽の判弁を行っていることは間違いない、その一つの例を挙げれば、『神仙靈感使魂法訣』に、

堅磐曰く、仙書万巻を積みて閲すと雖も心此にあらざれば、見れども見えず、聞けども聞えず、盲聾の如し。或は此法、

仙経に於て玄胎守一太玄法と曰ふ。浅学の士は、其の名目を見るも其行を知らず、其法を聞けども而も耳底に入らず。所謂盲聾人とは之なり。又曰く、万巻を積みて博識を護する士は、其法を閲すと雖も必ずしも行はず。所謂金丹を得て服せざるが如し。是れ神仙無縁の士なり。⁽¹⁵⁾

とあるように、この記述から推測すると、宮地神仙道において重んぜられている玄胎凝結法との合致するか否かが一種の判断基準の軸とされたのではないかと考えられる。

二、『玉條一籤』に抄録された道書

前章で宮地水位の道書に対する認識を論じ、宮地水位が多くの道書に対して偽書・偽言が混入しているという認識であったことを述べた。では、如何なるものが正書であり真伝であるとしたのであろうか。ここでは宮地水位が多くの道書の中でも真伝・真訣と認めたものを抄録したといわれる『玉條一籤』という書物を検討することにした。内容は多数の道書より真伝・真訣と認められる部分を白文で抄出したものである。その中から、『道蔵』に収められた道書を中心に、その一端を窺ってゆく。紙幅の関係上、その全文をここに挙げることはできないため、その要点と思われる部のみを列挙してゆく。また、抄出された道書の文には原

典と比較した場合、脱字・脱文、または抄略された部分がある。これは宮地水位が意図的にそのように抄録したのか、単なる誤写であるのかは、今となつては判然としないが、ここでは原則として抄出された文章そのままという形で書き下し、引用してゆくことにする。但し文章が通じない場合のみ『道藏』等の原典の文章を参酌し、文意が通ずるようにした。

① 『参同契』下編 魏尚陽著

惟れ昔の聖賢、玄を懷き真を抱く。九鼎伏練し、迹を化して隠淪す。精を含み神を養ひ、徳を三光に通ず。津、腴理に溢れ、筋骨緻堅なり。衆邪辟除し、正氣常に存す。異積長久、形を化して仙なり。後生道を好むの倫を憂へ憫む。風采に隨傍し、古文を指畫し、圖籍を著し爲り、後昆に開示す。枝条を露見し、本根を隠し藏し、諸名に託號し、衆文を覆謬す。學者之を得るも、櫝に韞みて身を終ふ。子、父の業を繼ぎ、孫、祖先を踵ぐ。傳世迷惑し、竟に見聞する無し。遂に官者をして仕へず、農夫をして耘を矢ひ、商人をして貨を棄て、志士をして家貧しからしむ。吾甚だ之を傷み、定めて此の文を録す。字約にして思ひ易く、事省にして繁ならず。その条を披列し、核實觀るべし。分兩數有り、因りて相循ふ。故に亂辭を爲る。孔竅其の門、智者審にし、意を用て焉を觀よ。^{①⑥}

② 『靈法畢法』「交媾龍虎篇」 正陽真人鐘權雲房著

眞訣に曰く、腎中氣を生じ、氣中に眞水有り。心中液を生じ、液中に眞氣有り。眞水眞氣は乃ち眞の龍虎なり。陽天に到りて升り難し、太極陰を生ず。陰地に到りて入り難し、太極陽を生ず。天地の理此の如し。人天地に比するを得ざるは、六慾七情物に感じて志を喪ひ、元陽を耗散し、眞氣を走失するなり。離卦の腎氣心に到るに當り、神識内定し、鼻息少しく入れ遅く出し、綿綿として存するが若くして、津口に満ちて咽下すれば、自然にして腎氣心氣と相合して太極液を生ず。坎卦の心液腎に到るに及び、腎水に接着すれば、自然にして心液腎氣と相合し、太極氣を生ず。眞氣を以て液を戀ひ、眞水氣を戀ひ、液と眞と本自ら相合す。故に液中に眞氣有り、氣中に眞水有り、互に相交合し相戀ひて下る。名づけて交媾龍虎と曰ふ。火候差ふ無ければ抽添して宜きに合へば、三百日養ひて眞胎に就きて、大藥成る。乃ち質を煉り身を焚き朝元超脱の本なり。^{①⑦}

③ 『浮黎鼻祖金藥秘訣』 廣成子著

神室變化章

室は鷄子に象り、黃白一家、上下の兩釜、中虛寸窩、骨肉金玉、開きて瓊花に就き、五星攢會す。萬靈贊嘉し、神通廣溥にして、感應差ふ無し。

火水化育章

日主を提攜し、月宸を併せ羽け、水流親しく下り、火燥昇騰す。形を三五に養ひ、法を晨昏に合す。金水十六にして、萬物化醇す。箕を旋り斗を歴て、策ちて鬼神を役す。

服食登眞章

刀圭口に入り、人化して仙と爲る。飛形拔宅して、隱顯干る無し。梵氣合體し、天と興に長年、秘行眞妙にして、心箋を泄らすこと勿れ。¹⁸⁾

④『鐘呂二仙傳道集』

正陽眞人鐘離 權雲房著 純陽眞

人呂 巖洞賓集

呂曰はく、所謂造化は陽をして長じ陰をして消さしめ、金丹成る可くして、胎仙自ら化すとは何ぞや。鐘曰く、人の心・腎相去ること八寸四分、乃ち天地定位の比なり。氣液太極相生ずるは、乃ち陰陽交合の比なり。一日十二時は、乃ち一年十二月の比なり。心液を生ずるは自ら生ずるに非るなり。肝液降るに因りて心液行き、液夫婦に行き、上よりして下り以て下田に還る。乃ち婦夫の宮に還ると曰ふ。腎氣を生ずるは自ら生ずるに非るなり。膀胱の氣升るに因りて腎氣行く、氣子母に行き下より上り、以て中元に朝す。乃ち夫婦の室に返ると曰ふ。肝氣腎氣を導引し下よりして上り、以て心に至る。心火なり。二氣相交り肺に薰蒸し、液下降して心より來

る。皆心液を生ずると曰ふ。液心より生ずるを以て耗散せず。

故に眞水と曰ふなり。肺心液を傳送して上より下り、以て腎に至る。腎水なり。二水相交り膀胱に浸潤し、膀胱の氣上升し、消磨せず。故に眞火と曰ふ。眞火水中より出て、恍恍惚惚、其の中に物有り、之を視れども見る可からず。之を取れども得る可からざるなり。眞水火中より出て、杳杳冥冥、其の中に精有り、之を見れども留むる能はず、之を留むれども住まる能はざるなり。呂曰はく、腎水や水中氣を生ず。名づけて眞火と曰ふ。火中何れの者が物爲るや、心火や火中液を生ず、名づけて眞水と曰ふ、水中何れの者が精爲るや、火中の物、水中の精、既に形状求むる可き無し、縦へ之を求むるも又得難く、縦へ之を得るも又何に用ひんや。鐘曰はく、前古の上聖道成り、二物を離さず、交媾して黃牙を變じて、数々胎に足して完ふして以て大藥を成す。乃ち眞の龍、眞の虎なり。¹⁹⁾

⑤『心印經』

無上玉皇著

上藥三品は、神と氣・精。恍々惚々、杳々冥々、無を存し有を守り、頃刻にして成る。回風混合し、百日功靈、黙して上帝に朝し、一紀にして飛昇す。知者は悟り易く、昧者は行なひ難し。天光と履踐し、呼吸して清を育む。玄牝に出入して亡すが若く存するが若し。綿々として絶へず、蒂を固くし根

を深くす。人各々精有り、精其の神に合し、神其の氣に合し、氣眞に合體す。其の眞を得ざれば、皆是名に強ふるなり。神能く石に入り、神能く形を飛ばさば、水に入れども溺れず、火に入れども焚けず。神は形に依りて生じ、精は氣に依りて盈つ。雕まず残らず松栢青々たり。三品の一理は妙にして、聴く可からず。其の聚れば則ち有り、其の散ずれば則ち零。七竅相通じ、竅々光明なり。聖日聖月、金庭を照耀す。一得永得して、自然に身輕し。太和充溢して、骨寒瓊を散らす。丹を得れば則ち靈、得ざれば則ち傾く。丹は身中に在り、白に非ず青に非ず。之を誦すること萬遍にして妙理自ら明らかなり。²⁰⁾

⑥ 『清淨經』

太上著

老君曰はく、大道は無形にして天地を生育す。大道は無情にして日月を運行す。大道は無名にして萬物を長養す。吾其の名を知らず、強ひて名ずけて道と曰ふ。夫れ道なる者は清有り濁有り、動有り靜有り。天は清にして地は濁、天は動にして地は靜、男は動にして女は靜。本より降りて末に流れて萬物を生ず。清なるものは濁の源、動なる者は靜の基。人能く常に清靜、天地悉く皆歸す。夫れ人神は清を好むも心に之を擾し、人心は靜を好むも慾之を牽く。若し能く常に其の慾を遣つれば心自ら靜。其の心を澄まさば神自ら清。自然に六慾

生ぜず、三毒消滅す。能はざる所以の者は、心未だ澄まず、慾未だ遣てざるが爲なり。能く之を遣つる者は、其の心を内觀するも、心に其の心無し。其の形を外觀するも、形に其の形無し。其の物を遠觀するも、物に其の物無し。三者既に悟り、惟だ空を見る。空を觀るも亦空、空に空なる所無く、空なる所は既に無。無を無とするも亦無。無を無とするも既に無。湛然として常に寂たり。寂たる所無ければ、欲豈に能く生ぜんや。欲既に生ぜず、即ち是れ眞の靜。眞常に物に應ず、眞常に性を得、常に應じ常に靜、常に清淨なり。此の如く清淨にして漸く眞の道に入る。既に眞の道に入らば、名づけて道を得ると爲す。道を得ると名づくと雖も實に得る所無し、衆生を化するを爲して、名づけて道を得ると爲す。能く之を悟る者は、聖道を傳ふる可し。²¹⁾

⑦ 『赤文洞古經』「操眞章」

太上著

有動の動は、不動より出ず。有爲の爲は無爲より出ず。無爲ならば則ち神歸す。神歸さば則ち萬物寂たり。不動ならば則ち氣泯ぶ。氣泯べば萬物生ず。神神相守り、物々相資し、厥の本根に歸す。黙して之を悟り、我自ら之を識る。無間に入らば、不死不生、天地と一と爲るなり。²²⁾

⑧ 『入葉經』

至一真人崔公希範著

先天の炁、後天の炁、之を得る者は常に酔ふに似たり。日に合有り、月に合有り、戊巳に窮め、庚申に定む。上鵠橋、下鵠橋、天は星に應じ、地は潮に應ず。巽風に起り、坤火を運らし、黄房に入りて至寶を成す。水は乾くを恐れ、火は寒を怕る。差ふこと毫髪なるも、丹を成さず。鉛龍昇り、汞虎降る。二物を驅りて縦放すること勿れ。産は坤に在り、種は乾に在り。但、た至誠のみ。自然に法り、天地を盗み、造化を奪ひ、五行を攢め、八卦に會す。水は眞水、火は眞火、水火交りて、汞老ひず。水能く流れ、火能く焔へ、身中に在り。自ら驗す可し。是の性命は神氣に非らず。水郷鉛は只だ一味。歸根の竅、復命の關、尾閭を貫き、泥丸に通ず。眞の橐籥、眞の鼎爐、無中の有、有中の無。黄婆に托し、姤女を媒とし、輕々たる地、黙々として舉る。刀圭を飲み、天巧を窺ひ、朔望を辨じ、昏曉を知り、浮沈を識り、主客を明にす。聚會を要するには、間隔する莫かれ。藥を採る時、火功を調し、氣の吉を受け、凶と成るを防ぐ。火候は丹を傷むる莫きに足らば、天地の靈、造化の慳、初めて胎を結び、本命を看、終に脱胎して、四正を看る。密々の行、句々應するなり。²³⁾

⑨ 『胎息經』 唐 幻眞先生著

胎は從ひて氣中に伏して結び、氣は從ひて胎中に有りて息

ふ。氣身に入りて来る、之を生と爲す。形を去離す、之を死と爲す。神氣を知り、以て長生す可し。固く虚無を守り、以て神氣を養ふ。神行かば即ち氣行き、神住れば即ち氣住まる。若し長生せんと欲すれば、神氣相住り、心動念せざれば、来る無く去る無し。出でず入らずして、自然に常住す。勤めて之を行ふが眞の道路なり。²⁴⁾

⑩ 『太清中黄胎藏論』 蒼嶼道人著

内に形神を養ひ嗜慾を除く、専ら靜を修め身を定めれば身は玉の如し。上蟲は腦宮に居り、萬端齊く起りて子の心を揺がす。常に飲膳の味、無窮なるを思ひ、心に病容の若きを生ずるを想起す。二者は中蟲明堂に住す。子をして魂夢、神飛揚せしむ。或ひは美にして定方無く、或ひは進み、或ひは退きて、常を守ること難し。精神恍惚として猖狂に似たり。子をして坐臥し穀糧を敗らしむ。子若し之を知らば、道自ら昌らかなり。三者は下戸腹胃に居る。子をして淡泊常に無味ならしむ。靜ならば則ち心孤にして感思多く、撓れば則ち煩ひ怒り起ること多く、人をして邪亂にして情理を失はせしむ。子能く之を守り三蟲を棄てれば、五牙九眞の氣を見ることを得るなり。五牙は咸辛酸の味を惡む。三蟲有りて、鎮に子に隨ふを爲す。尸鬼坐して汝の身の死するを待つ。何ぞ安然として驚畏せざるを得んや。子に勤めて將に心に煩事を捨

てさせ、超然として自ら煙霞の志を得さしめんとす。鹹美辛酸は五藏の病、津味牙に入り心境を昏くす。致さば六腑の神氣を衰へせしめ、百骸九竅靈聖ならず。九仙神氣常に自ら靈にするは、三蟲已に死さば安寧に復す。子の運動呼吸に由りて生じ、居りて丹田の内に在りて癸々たり。地府籍を除き、天名を録す。坐して陰司を察し、神明を役し、胎仙を合し、道自ら成る。胎仙氣を食して得、却へりて眞氣を閉ぢて胎息を成す。^⑤

およそ『玉條一簣』より十種の道書の要点と考えるものを列挙してみたが、先ず①の『周易参同契』は煉丹の書として著明な書である。本来は外丹法を説いたものであったが、後代に至つてその内容は内丹の比喩的表現であると解釈された。②の『靈法畢法』は瞑想により体内に丹を作る内丹を説くもので、『玉條一簣』では「交媾龍虎篇」が抄出されている。この篇は内丹の技法の一つである。陽龍陰虎がそれぞれ陽氣・陰液と考えられており、簡単にいうと、陽龍は心臓において完成し、陰虎は腎臓において完成する。この両者が交わり、肘後飛金晶等の技法を行い、内丹を成就させる方法である。他の④・⑧もこの「交媾龍虎」の技法を述べた部分が抄出されている。③・⑤も内丹法の一つを述べた部分を抄録する。⑥は内観法と思われる部分、⑦は氣に関する部分、⑨は胎息について、⑩は体内の三戸を消滅させ、五臓神を感想し

胎を完成させる部分が抄出されている。ここに挙げた道書は十種ではあるが、他の道書に関してもほぼ存思・服氣等、内丹の技法に関するものが大部分を占める。この内容から考えれば宮地水位が道教の中でも真伝であるとしたものは、内丹を中心とした各種技法であつたと理解できる。そしてそれらの技法を自己の教義の中に積極的に取り入れたことは明白である。『玉條一簣』は最後に宮地水位自身の著書である『玄学樞要』下巻「学仙篇」を抄録している。そこには、

夫れ仙を學ぶの術爲るや、生氣の時を待ち、冥目鎮心虚無恬膽、耳に聞く無く、口に言ふ無し、握固して口に塵氣を吐くこと三次。鼻を以て生氣を吸ひ、以て身体の丹田に蔵す。息を閉づること良久しくして、意に隨ひて徐るに之を吐くこと三次。舌を以て唾を鍊りて嚥下すること三廻、眼より明早に至るまです。且つ庭を歩み髪を抗げること三十にして止む。常に叩齒すること三十六通、日月を出すを見る者は、其の光芒を服し、三戸を辟して七魄を滅す。門を出でて山に入るは必ず靈寶三百六十四の眞符、并せて七十五の眞の咒録を佩ぶる可し。又神仙を得んと欲する者は、必ず七十三寶眞形圖を得可し。奉道の士は符圖咒を尊敬して、朝夕敬みて二十六の大神命を拝し、以て死籍を脱して長命の籍傍に轉ず。王相を以て日々腎液を飲み、骨肉を變じて、陽明の靈體と爲

り、感想の術を行ひて以て上古天眞の世を覺悟す。或は又使魂法を行ひて以て靈魂を脱し、三清に周遊す。或ひは又諸々の仙境を旋り覽る。此に至る者は、眞氣下丹田に溢れ、水火相見へ、黃胎既に長大にして還た成就して、太目自ら生じ、玄胎自ら成る。²⁹⁾と記されて終っている。

おわりに

以上、宮地水位の道書に対する認識と『玉條一籥』に抄出されている道書の内容を見てきたが、宮地水位が道書の中でも真伝であると認めたものは主に内丹に関する文献であつたと考えられる。このような判断は宮地神仙道における秘儀としての「玄胎凝結法」という行法と密切な関係があることは前述したとおりである。「玄胎凝結法」のプロセスを簡単に述べてゆくと、①感念の法により七魄三尸を体内から消滅させる。②脱魂術を修する。③五色の童子を觀想する。④玉色の童子五人が一体化し行者と同形となる。⑤これにより玄胎は完成し肉体より玄胎へと魂を転入し終に神仙となる。という順序である。『玉條一籥』に抄出された道書の引用内容は、内丹の諸技法を各道書より抜粋して成立している。道教における内丹法は、不老不死の身体を獲得することが目的であることはいうまでもないであろう。「玄胎凝結法」も同

様の目的であることを考えると、『玉條一籥』に抄出された道書の各部分は、つまり、「玄胎凝結法」の理論的根拠となるものであると考えられる。宮地水位の「玄胎凝結法」はこれらの道教文献を基調として、更に独自の創意工夫を加えて完成させていったものであろう。そういう関係において『玉條一籥』という書は宮地水位の道教理解の方向性を示すことを明にした極めて特色ある書物といえる。

注

- (1) 清水宗徳『宮地神仙道玄義』八幡書店 六一九頁 昭和六三年
- (2) 宮地水位『神仙秘書』八幡書店 一〇三頁 平成十一年
- (3) 王明『抱朴子内篇技釋』中華書局 三三七頁
- (4) 宮地水位 前掲書 二二頁
- (5) 前掲書 三〇頁
- (6) 前掲書 三〇頁
- (7) 前掲書 三〇頁
- (8) 前掲書 一二四頁
- (9) 前掲書 一〇二〜一〇三頁
- (10) 前掲書 一〇〇頁
- (11) 前掲書 一〇二頁

- (12) 前掲書 一一〇頁
- (13) 前掲書 二二〇頁
- (14) 前掲書 二二四頁
- (15) 前掲書 一一四頁
- (16) 前掲書 三三一～三三二頁
- (17) 前掲書 三三二～三三三頁 原文に「火候無差」とあるが文意通ぜぬ故、『道藏』に従い「火候無差」に改めて訓読した。
- (18) 前掲書 三三六～三三七頁
- (19) 前掲書 三三九～三三〇頁 原文に「乃天地定位之此也：乃陰陽交合之此也：乃一年十二月之此也」とあるが「此」では文意が通ぜぬ故、『道藏』に従い「比」に改めて訓読した。また、「肺傳送心自上而下」とあるが文意通ぜぬ故、『道藏』に従い「肺傳送心自上而下」に改めて訓読した。
- (20) 前掲書 三三〇頁 原文に「二得永得」とあるが文意通ぜぬ故、『道藏』に従い「一得永得」に改めて訓読した。
- (21) 前掲書 三三四頁 原文に「滬其心」とあるが文意通ぜぬ故、『道藏』に従い「澄其心」に改めて訓読した。
- (22) 前掲書 三三五頁 原文に「有動之動出於不」とあるが文意通ぜぬ故、『道藏』に従い「有動之動出於不動」とし、「動」の字を補って訓読した。
- (23) 前掲書 三三七頁 原文に「黙々拳」とあるが、文意通ぜぬ故、『道藏』に従い「黙々舉」に改めて訓読した。
- (24) 前掲書 三四一頁
- (25) 前掲書 三五七頁
- (26) 前掲書 三五八～三五九頁

An aspect of taoism doctrine
rerred to “Gyokujyoutusen”

Shinji WAKAMATSU

Department of Humanities, Faculty of Human Science,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi

807-8586, Japan

No English abstract